

鶴田 英昭 展 ギャラリートーク

「美術と私」

平成 28 年 2 月 7 日（日）13:30

エイブル 2 階 交流プラザ

こんにちは。

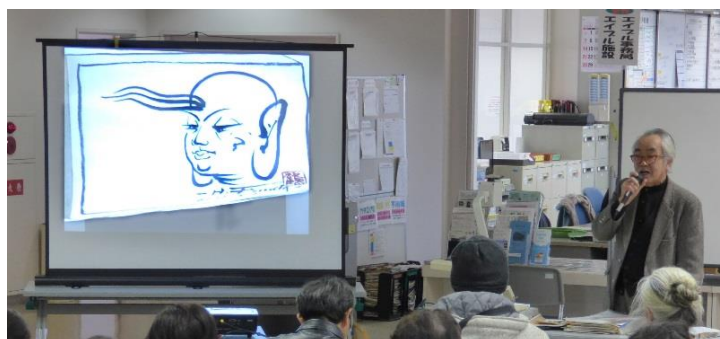
自分の故郷で、自分の今までの作品や人生を語るというのは、まずほとんど機会がないのではと思いますので、今日は本当に感謝しています。

絵の、見えない後ろにあるもの、つまり色々な人たちや、色々な自然との出会い、何かそういうものが全部凝縮されて、こういう絵になって出てくるように思います。だから私の絵は、あまりつくろうものではなくて、何か出



てくるものを待つのです。行ってからすぐ描けるわけではなく、風景やヌードを見たからといってすぐ描けるわけでもないのです。だから、様々なものをいろいろイメージしていくうちに、こういうのを描けばと、どこからか聞こえてくるような、何かイメージが広がってくるのですよ。だから、あんまり強引に作るということではなくて、そういうものがピピッときたときに、こういう作品になってきています。そういう所を念頭に置きながら、見ていただければと思います。

これは、レオナルド・ダ・ヴィンチが「素描論」の「若者たちへ」という文章の中で書かれているものなのですが、「チャンスはどこにでもあるよ」と、「一生懸命努力しなさい」と。そしてそのチャンスの神様は、前髪を前になびかせながら、どこからともなく歩いてくるというのですね。なびいてくる。これが過ぎてしまったら、頭がツルツルでチャンスをつかむことができない。だから、チャンスの神様が前髪を前になびかせながらやってきた時に、しっかりつかみとれる人になりなさいと…。人生の中で何回かそういうチャンスがあるから、若い時からそういう努力をすれば、チャンスが来た時に、「よし、今だ!」と、思う時があるらしいのです。僕はもう 70 を越えましたけれど、実は今日もそのチャンスの日なんですね。もう若いとは言えないのですけれど、気持ちだけはすごく若いつもりです。



僕が高校に在職していた時に担任をしていた生徒達には、名刺大にチャンスの神様を描いて、ポケットに入れておきなさいと、卒業する生徒達全員に渡していました。チャンスの神様（裏に「夢」と書いてい

ます)、略して「チャン神」と言っていました。「チャン神」は誰にでも来るのだから大事にしておきなさいと。今でも同窓会などに行くと、必ずこれを持ってきます。この前、アメリカに行った子が、アメリカの人に見せたら腹抱えてみんな笑ってましたよと話していました。お互いのコミュニケーションが取れた時に、そのチャンスの神様が来るのですね。よかったら皆さんも使ってください。何か良いことがあると思います。ダ・ヴィンチの保証付きです。

この写真は、今朝風呂に入っている時、東の空からボカッと上がってきた太陽です。僕はあわててカメラを取りに行き、その太陽を撮りました。今、うちの庭の緋寒桜は蕾がいっぱい。その後にオレンジ色の太陽がすごいのです。雄大で神秘性が感動です。ぼーっと燃えている。「伸び伸び頑張っているか?」「うん、やるかい?」って。なんか



そういう感じの太陽だったのです。うちの風呂は露天風呂形式で、庭の桜の彼方の有明海を通し普賢岳が鎮座しています。今朝の太陽は不思議な気迫に満ちた太陽、「チャン神」のような気がしました。

「私の絵の裏側にあるもの」について、小学校時代から振り返ってみます。

小学校時代の厳しい女の先生に、よくビンタされました。でも、この先生のおかげで、さぼったらいかなあ、勉強せんといかなあと思いました。

中学校時代は、美術の小池先生（一水会）からよく鍛えられました。西日本スケッチ大会とか祐徳神社のつつじ祭りとか、あちこち連れて行っていただいて、たまたまその時に賞をもらったりしたものですから、僕は絵に向いているんじゃないかと勘違いして、それで今でも絵を描いているわけです。やっぱりそういう先生との出会いというのは大きいですね。その時その時でそのバックにあることの大きさですね。人生が変わる。

中学校の時、僕はボーイスカウトに入ったのですが、これで社会というのがよく見えてきました。いろんな所にボランティアみたいな感じで行ったり、自然の中での生き方など、とても勉強になったと思います。

鹿島高校では、岩永京吉先生によく鍛えられました。先生は自分から教えるということはありませんでした。先生は、鹿島高校と鹿島実業高校とを掛け持ちしておられ、忙しく、普段は図書室におられたのですが、生徒の方からデッサンを描いて持っていかないと見てもらえませんでした。おい、描けよ、というような先生ではありません。それで、いろいろ描いて図書室まで持っていくわけです。特に木炭デッサンは、実物を見たわけではないのに、「ここはなんかおかしいのじゃない?」「ちゃんと見たかい?」「光はどっちから来ていたかい?」「どのくらい厚みがあったかい?」「どのくらい重たかったかい?」などと言われるのです。見もしないで間違っているなんてとんでもないと思って、石膏像を前に、もう一度言われたことを辿ってみると、先生の言う通りなんですよ。これまたビックリなんですね。先生は、物を視る力というのがすごい。やっぱり、審美眼、心の中にある美に対してのセンサー、岩永先生の持つておられるセンサーがとても鋭いわけですね。真実をちゃんと見られて、真善美の中で、美だけではない、真というものが、本当に真実に物がちゃんとあるんだということを常に思っていらっしゃる。そういう先生で

した。そういう先生から高校時代習ったわけです。

また、高校時代は、金子先輩始め多くの先輩方が、僕たちの美術室によく来てくれました。それらの先輩たちが、僕たちが懸命に描いている美術室にポッとやってきて、いろいろ話をしてくれるのですよね。そういう先輩後輩のつながりがすごく強く、大変刺激になりました。

大学時代も、先輩たちの顔の下で、我が物顔で昔からいるような顔をして、他の新入生もいましたけれど、一番動きやすかったですね。先輩たちがそれだけ頑張っていて、三羽カラスとか、佐賀大学の特設美術科の中にもたくさんの伝説を作ってくれていました。そのレールの上を僕たちは来たわけです。

制作では、「カダパッス」というグループを作って、大学の中で友達とやってきました。これを逆から読んでみたら、おもしろいです。みんな、気持ちを飾らないで、みんなで話し合おうよと。だから、自分が嫌いだったら嫌いと言いあおう。絵がこういう所はこうだよと、上からとかではなく、お互いが裸になって、何でも言い合えるグループにしようということで、大学時代みんなでその名を付けました。

当時は大学紛争もありました。様々な権力に対して、疑問を持ちながらの戦いでした。ただ、そういう中で、緒方先生、石本先生、久富先生、特別講師の坂本善三先生とか、情熱的な先生方に巡り合い、色々な面で大変お世話になりました。だから、これも絵の裏側なんです。巡り会いなんです。一瞬一瞬の時間の中に、そういうチャンス、縁というのがあるのですね。

大学時代は、戦いの時代でしたが、創作活動には一番大事な「自由」というのをすごく感じさせてくれた時代でもありました。人生の中で帰りたいと思う時には、やはりこういう時間と空間に帰りたいですね。自由で、のびのびしていて、何の煩わしさもない、とにかく絵 1 本でいけるといふ、そういう世界ですよね。みんなと真剣に戦っている場面というのが、非常に爽やかでしたね。あとは、飲んでもいいですね（笑）。

大学卒業後は、うちは農家で僕は長男だったのですが、どうしても絵が描きたくなって、弟には申し訳ないなと思いながら、九州から出て、神奈川県の上野原に行きました。

上野原には中学校の教員として 2 年間いたのですが、教員としての出発、人間としての出発というのか、この 2 年間というのは非常に充実した大事な 2 年間でした。上野原というところは、港町で、人情味が厚くて、九州からよく出てきたなあと、皆さん温かく迎えてくれました。部屋代を 2 年間タダにしてくれた親父さん、取れたてのマグロの内臓や珍しい美味しい食事を作ってくれた食堂のおばちゃん、教員というのは子ども達の前に立つのだから自分の専門をちゃんとしなさいと、教師としての心構えを教えてくれた社会科の先生、男でも茶道くらい習っておきなさいと言って、作法だけでなく日常生活における気遣いなども教えてくれたお茶の先生。また、中学校の先生方が熱い集団でした。子どもたちの自主性をどう伸ばすかということの研究していて、毎日、8時、9時まで職員会議です。教員としてもここで最初に鍛えられました。

その後、長崎県諫早市にある私立高校の浜田先生という方から、専門家を育てるから来てくれと呼ばれて、僕はもう上野原に来たので、九州には帰りたくないと言ったのですが、熱意に押されて、結局、帰ってきました。

その私立高校は昭和 42 年開校ですが、その当時から産業デザイン科、服飾デザイン科という、全国でも珍しい科がありました。そこで、即戦力のあるプロを育てるのです。絵画、工芸、マンガ家、グラフィックデザイナー、工業デザイナー、だから卒業生には、大手の自動車メーカーに行った子がたくさんいます。あとは、京都の織物や飛騨高山の彫刻とか、当然、油絵描きや彫刻家になりたいという生徒もいます。

大学に行かなくても即戦力のある子たちを作ろうということで、30 数年間、60 歳までやってきました。現在では大学進学が主になっています。

面白かったですよ、この個性味の強い生徒たちとは。とにかく毎日毎日が闘いで、学校内に泊まることもありました。まず学校との闘い、校長や教頭たちとの闘い。生徒たちを連れて外にモチーフを取りに行くと、なんでデザイン美術科ばかり外に連れて行くのと非難される。福岡の美術館で鑑賞させたい展覧会があるからと言うと、なんでデザイン美術科ばかり特別扱いしないといけないと言われる。生徒たちを育てるためにはそれが必要なのだと主張するけれど、なかなか分かってもらえない。また、ヨーロッパに美術研修に行くという企画を何年か続けて出しました。スペインに行ったらこうしたい、パリに行ったらここに行きたいなどと細かに計画して、校長に出して、結局僕が 59 歳の時に OK が出ました。次の年から行ける。僕は春休みに行けると思っていたら、あなたはもう退職だからと（笑）。後の人たちがみんなフランスなんかに行くわけですね。生徒たちと一緒に行って、描きたかったのですけれどね。画廊がここにあるぞ、裏道行こうか、などと言いながらね。残念でした。



そこに大きな絵を 3 点掲げていますが、一番左の絵は、子どもシリーズ（佳乃子シリーズ）のうちの 1 枚です。これは、長崎県展で知事賞をもらった作品ですが、このシリーズは、車輪の連続と、子どもから見た世界をイメージしながら、コラージュしながら描いています。車輪は車輪だけ描いて、根っこは根っこだけ描いて、全体的にイメージを創り上げます。だからアトリエはいつもゴミだらけです。高校の時の美術部の連中とか、そういう生徒たちと一緒にキャンプに行ってみたり、枯葉を取って来てみたり、崖の所にスケッチに行ってみたりしながら、それらを全部スケッチ合成して描いていきます。生徒たちと一緒にになりながら、二足の草鞋です。だから画家と紹介されるのが僕はどうも面映ゆくて。僕はただ絵が好きなんですとしか言いようがない。そして、生徒たちと一緒に県展に出します。同じ土俵でやれるわけですからね。やっぱり美術の教員はいいなあと、そういう時思いました。上から押さえつけるのではなくて、一緒に展覧会に出すわけです。美術部員の油絵を、そして僕も一緒に出す、そういうことです。

一番右の作品は干潟シリーズの 1 枚です。子どもを連れて渡り鳥とか朝早くから見に行きました。シチメンソウが真っ赤に染まるのですよ。それが多良岳をバックにもものすごく幻想的でした。でも、それが全部だめになった。なんで堤防を締め切るのですかね。減反政策をしながら土地を作るというのだから矛盾しているじゃないですか。僕のうちは農業だったからよくわかります。そういう命をたくさん宿した干潟、渡り鳥もいっぱい渡ってきます。

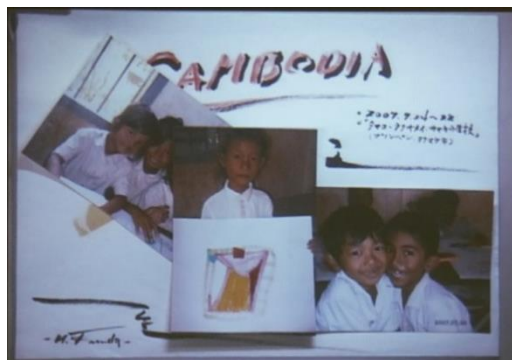


干潟は、女の生命力の産むすごさを感じさせます。男はしょうがない、ほんとに早く死ぬんだと先月の古稀の同窓会の時にも思いました。女はしぶといもん(笑)。そのしぶとさが、干潟の生命力と重なるなあと、どこか感じるわけですよ、理屈じゃなくて。ドロドロした中に、女の強さと一緒になっている。このシリーズがパネルの裏の方にもあって、赤い腰巻みたいなものを着けていますけれど、赤というのが生命感があって良いですね。だけど最近、弱ってきていると感じます。そういう色を使いきれない…。

あとでカンボジアの話をしませんが、ポルポト政権とか悲惨な戦争のこと、また去年は福島原発の放射能を浴びて学校に入れない子どもたちと一緒にキッズ・ゲルニカをやったのですが、日本人はこれでいいのだろうか、戦争とか、原発とかね。そういうところで、怒りみたいなものがどこかにあるのです。描いているときにはそういうのはないのですよ。本人は至極おとなしく描いているつもりなのです。ところが後で見たら、なんでこんなに激しいのだろうか。今のと絵を比べてみると、今の絵がなんと情けないことかと思うわけです。だからもう一遍、この時に帰りたいと思いますね。

スペインのプラド美術館のゴヤの部屋に、砂嵐か何かの中に犬が1匹顔だけを出している絵があるのですが、もがいてももがいても蟻地獄みたいな感じの中で、なかなか自分がかみきれない、自分というのがわからない、不安で不安でたまらない、どんどんどんどん周りから押し寄せてくる砂に埋もれていく。そしてこの犬の目が非常に虚ろで、どこか人間の死というか、その先を見ているような、宇宙、天国を見ているような、そういう感じを受けたのです。

何故この絵の話をしたかという、キッズ・ゲルニカのワークショップでカンボジアに行ったときに、トゥール・スレン博物館を見学しました。ここは、ポルポト政権下に元高校の校舎を刑務所として使用していた所ですが、ポルポトの残虐と粛清の舞台で、約2万人が犠牲になったと言われていました。人間のドクロがいっぱい山積みしてあって、各教室には拷問の鉄ベッドとかがそのまま置いてあるのですね。それを見たときに、なぜか、このゴヤの絵を思い出したのです。悲惨というか、人間の権力のわがままというか、人の命を何とも感じない。ゴヤの絵は小さな犬がたった1匹しかいないのに、不思議にそういう時に出てくる強いメッセージ性があると思いました。



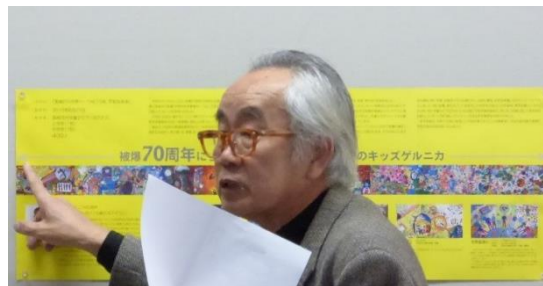
この写真は、カンボジアの子どもたちです。みんな裸足で、目がキラキラしています。とにかく、勉強することに飢えています。そして両手を合わせ、良く挨拶をしてくれます。

この時は、自分の大事なものを描きましょうと言って、描かせた時の写真です。大事なものとして、ほとんどの子は山とか海とか花、鳥など具体的なものを描いたのですが、この子だけは四角い抽象画みたいな絵を描いたのです。「何描いたの、教えて。」と問うと、実は紙袋だということです。「何を入れるの?」

「お母さんに手紙を書きたい。」と…。ということは、お母さんがいないわけです。どこか出稼ぎに行っているのか、何か事件があったのか。子どもたちと出会った先には、絵の先には、何かが見えてくるので

すね。社会状況とか、その子どもの背景まで見えてきます。だからこの子どもたちには非常に勉強させられました。

それから、こちらの方はキッズ・ゲルニカです。昨年（2015年）長さ70mの絵を子どもたちに描かせました。原爆が投下されて70年、被爆した長崎市立山里小学校体育館で、470名くらいの幼稚園から中学生までの子どもたちが来てくれました。ピカソが描いたゲルニカの絵は、3.7×7.8mあります。これが元々キッズ・ゲルニカの寸法です。原爆ではないのですが、ゲルニカという村がナチ



スから無差別攻撃を受けて、ピカソは怒っているわけです。なんでそういう、わけのわからないような攻撃をするのかと。今の中学校の教科書には必ずこの絵が載っていて、反戦の原点になっています。これは絶対子どもたちと一緒に、平和、幸、戦争…などの話をしてみてください。

（ご来場の元長崎新聞記者の山下さん）



鶴田先生とは、長崎の現職時代に仕事を通して何度も取材をさせていただいておりましたし、私も絵を画いているので、それもあって以前からお付き合いがありました。

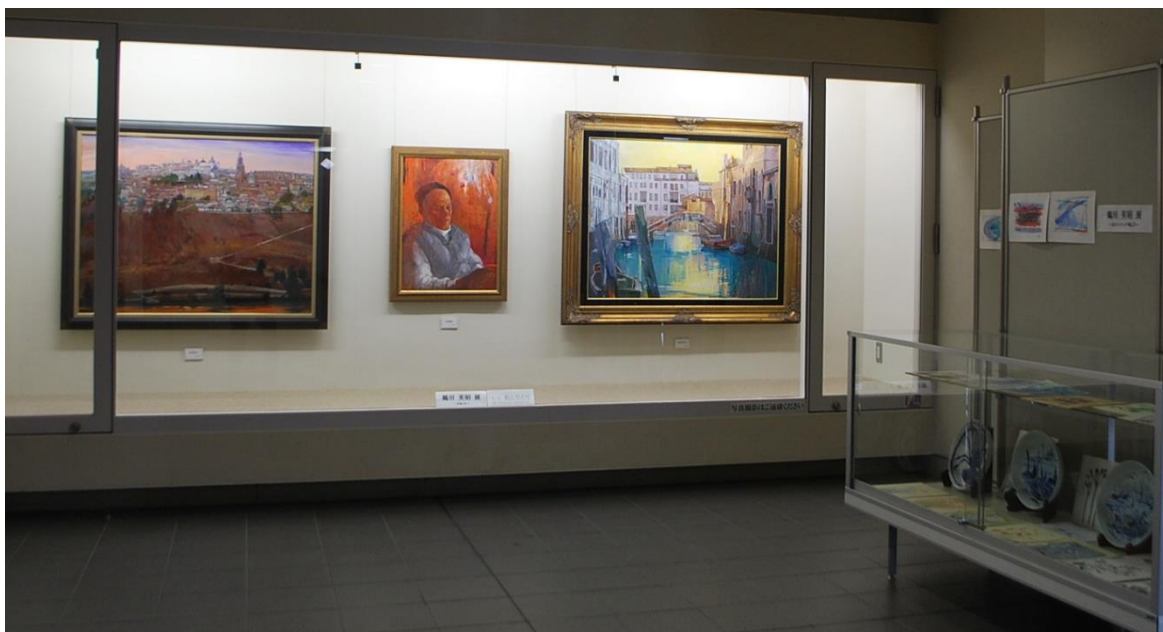
昭和2年の史実である日米人形交流の企画をした時に、私たちは紙面を通して全国に1000円募金を募り里帰りを実現させましたが、その時の余剰金を途上国のカンボジアの子どもたちの教育に役立てようということで、カンボジアにタマコスクールというのを建設したのが2003年です。その後、2年に1回、長崎や近辺の若い人たちを誘ってカンボジアに行き、カンボジアの子どもたちとワークショップをしながら交流をしてきました。その時、鶴田先生ともお知り合いだったものですから、その度にお声をかけて、向うで子どもたちと色々面白いワークショップをしていただきました。その上で、創作においてもこういう作品が今でも続いており、色々な意味で「チャン神」ということは私たちもよく聞いてきましたが、本当にそういう事はあるのだなと今日は改めて実感いたしました。ありがとうございました。

（最後に、鶴田さん）

皆さん、「チャン神」を捕まえましょう。年は関係ありません。笑顔で、前向きに行けば必ずできます。いろんな人と出会うというのが一番いいですね。今日は本当にありがとうございました。



前期展示風景



後期展示風景